

令和 4 年 6 月 24 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00062

研究課題名(和文) 象数易の数理思想と術数学

研究課題名(英文) The Mathematical Thought in the School of Image-Number I-Ching related to the Study of Shushu

研究代表者

武田 時昌 (TAKEDA, TOKIMASA)

京都大学・人文科学研究所・名誉教授

研究者番号：50179644

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：象数易の二大学派である京氏易と先天易を中心として、象数易の数理思想に構造的把握を試み、先秦から清代までの史的展開を鳥瞰した。そして、天文曆数学、医学及び中国占術との相互作用を多角的に考察した。主要な考察対象は、(1)漢代象数易と曆運説、(2)宋明易図説と明末清初の批判、(3)京氏易の近世的展開、(4)医易のベクトル。

さらに、以上の考察を総括して象数易が術数学の理論構築に果たした役割を検討し、中国における自然哲学、科学思想の総合的研究に向けたフレームワークを行った。国内外の研究者との連携を図り、象数易研究の国際ネットワーク構築を推進した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

象数易はこれまで経学史において研究されてきたが、その数理思想は儒教の枠外においても大きな作用を發揮した。その二大流派である京氏易、先天易の理論構築は難解であり、部分的な研究しかなされていなかった。

そこで、その構造的把握を試み、理論的特色や史的展開を明らかにし、思想界にどのような影響を及ぼしたかを追跡した。そして、自然探究の学問や占術の理論的基盤となった具体的様相を探ることで、科学と占術が複合した術数学という特殊な学問領域を形成したことを明確にした。それによって、中国における自然哲学史、科学思想史を総合的に研究するための突破口を切り拓いた。

研究成果の概要(英文)：Natural science and philosophy in East Asia formed a unique field of study called the study of shushu, which consisted of various fields of natural science and divinations derived from the I Ching. Though the study of shushu is a field peculiar to East Asia where people want to evaluate the essence of the scientific culture of East Asia properly, it seems indispensable to grasp its structure and historical development.

Focusing on the school of Xiangshu, I tried to structurally grasp the mathematical thought of I Ching and gave a bird's-eye view of the historical development from Pre-Qin to Qing dynasty. Then, we considered the interaction with Calendrical science, medicine, and Chinese divination from various angles.

研究分野：中国科学思想史

キーワード：象数易 京氏易 先天易 術数学 曆運説 数理思想

1. 研究開始当初の背景

(1) 中国における自然哲学は、老子と易を理論的基盤に据えて発展してきた。その方面の研究には、山田慶兒『朱子の自然学』(岩波書店、1978)、三浦國雄『中国人のトポス 洞窟・風水・壺中天』(平凡社選書、1988)、堀池信夫『漢魏思想史研究』(明治書院、1988)『気の中国文化 気功・養生・風水・易』(創元社、1994)、川原秀城『中国の科学思想 両漢天学考』(創文社、1996)などがあるが、いずれも個別的な研究であり、包括的見地から系譜づけ、理論構造を解明する総合的研究はなされていない。数理的な側面で、中心的な役割を担ったのは、象数易である。象数易の理論的構造はこれまで十分に研究がなされていない。そのために、中国的パラダイム形成を明らかにできないでいる。

(2) 象数易には、漢代の京氏易、宋代の先天易の二大流派がある。それらの数理思想は、これまで儒教の聖典である五経の一つである『易』をめぐる注釈史、解釈史において考察され、経学の歴史のなかで位置づけられてきた。ところが、元来、易は古代王朝から用いられていた卜筮の書の代表格であり、後世においても易占として世俗に大いに流行し、聖俗の二面性を保有し続けた。そして、儒家の枠外に飛び出て、道教文化の周辺に生息する術数学(自然学や占術とが複合した学問領域)に特有の自然把握方式を提供し、自然哲学的な言説の理論源となった。この方面に関しては、2018年5月に川原秀城著『数と易の中国思想史：術数学とは何か』(勉誠出版)が刊行された。

(3) 術数学という学問領域は、近年に広く知られるようになった。漢代において、先秦方術から中世術数学への変容がどのように起こったのか、漢代象数易が台頭してから中世、近世にどのように史的展開を呈し、術数学の理論構築に関与したのかなどについて、本格的に論及したものはなく、研究するためのフレームワークを必要とする。中国における自然哲学史、科学思想史の研究が立ち遅れている要因はそこにある。

2. 研究の目的

本研究は、象数易の二大流派である京氏易、先天易の数理思想の解明に挑み、中国における自然哲学の総合的研究の端緒を開こうとするものである。

儒教の聖経である『易』は、陰陽五行説によって潤色され、天文暦数と結合することで、前漢に台頭し、中国思想の基層構造を形成する。その数理構造を構造的に把握するために、京氏易やそれに派生する易緯に展開された暦運説が、顛項暦などの古四分暦に派生する天文律暦学といかに関連するかを明らかにする。そして、漢代暦運説が、道教の終末論、中世占術の暦運説へとどのように変容したのかを検討し、道教文化の周辺に生息する術数学の理論形成との関連性を検討する。

さらに、近世に台頭する先天易や運氣論の暦数構造、京氏易に派生する断易の占術理論を考察し、象数易の理論的特色を明らかにし、思想的作用を探る。

3. 研究の方法

近年、馬王堆漢墓をはじめとする遺跡発掘によって、先秦から漢初に至る数多くの著述が出現し、前漢までの空白期を埋めることのできる資料が得られ、天文暦学、数学、医学の諸分野においても、古代思想、養生思想においても、実に衝撃的な証言をもたらした。すなわち、『九章算術』『黄帝内経』『神農本草経』の前身となる算術書、医薬書、秦から漢初に施行していた顛項暦に関する天文暦書などが出土し、黎明期の科学文化の存在を明示したのである。また、先秦から漢に至る思想書、養生書、占術書なども数多く出土し、そこには陰陽五行説、天人感応説や万物生成論に関する初源的な言説が大いに唱えられ、それを応用した自然哲学的な思索が多様に試みられていたことが明らかになった。

新出の資料群には、そのような漢以前の学術文化を明らかにする情報を満載するだけではない。もう一つ別方向の視座を供給している。それは、先秦と中世、近世との連続性を窺わせていることである。とりわけ、三国から隋唐まで数多くの医薬書、占術書が著されたが、胎児発生論や暦注として寄せ集められた占法のように、中世の諸書に展開された医術、占術はその起源が古代まで遡ることが判明した。

そのことは、道教、仏教の影響による中世的な側面に拘泥して、戦国末から漢初に至る道家思想や自然学、方術の後世的展開を軽視していたことの反省を促している。暦法で言えば顛項暦、医療文化では経絡説や彭祖に由来する養生術、六壬、太乙、九宮や兵陰陽と呼ばれる占術など、後世の祖型となった理論の根幹が早期に成立していた。そして、自然探究の学問が象数易を核とする占術と複合し、道教文化、仏教文化の周辺において先秦方術から中世術数学へと発展したことを明示し、緩やかな発展を遂げながら清末まで伝統社会に綿々と受け継がれてきたものごとを言い立てている。

したがって、漢代思想をフィルターにして古代から中世、近世にどのような連続面または不連続面を見出せるかについて、新出土資料に遡及的考察を試みる必要がある。とりわけ、象数易の数理構造や思想的作用を明確にして、中国における自然哲学の研究を本格化しようとするならば、不可欠な基礎作業である。

漢代思想において、中心的な論題は、政治思想において、災異説から讖緯説へと変容し、王莽、光武帝の王朝革命に革命イデオロギーを提供したことである。その推進力となったのは、周期的

な終末論によって予言と革命の王朝交替説を唱える曆運説である。その数理基盤には、天文曆数とともに象数易が深く関与する。漢代象数易には諸技法あるが、数理思想として後世に最も影響を与えたのは京氏易である。京房の伝記や『漢書』五行志によると、京房は独自の災異理論を駆使して政治思想を唱えた。曆運説においては、後漢の郎顛のように京氏易を学んだ人物が曆運に関する言説を数多く残しており、易緯とも密接な関わりを見出すことができる。

中世と近世との間に想定する断層についても、別の形での見逃し現象を指摘することができる。『易』の注釈史では、京氏易を主流とする漢代象数易が宋代に廃れて先天易に切り替わるとし、京氏易から先天易へというストーリーが語られる。ところが、宋代以降に京氏易の唱えた象数易理論がまったく姿を消してしまうわけではない。近世に流行した断易、五行易の基礎理論に取り込まれており、易占術の世界では中心的な技法として大いに活用される。つまり、経学史から離れて、術数学的な研究アプローチに立つ必要がある。

以上のような見地を踏まえて、考察対象を次の5項目に類別して行うことにする。

- (1) 漢代象数易と曆運説：京氏易、緯書の曆数構造
- (2) 先天易の曆数構造：自然把握と循環思想の遡及的考察
- (3) 京氏易の近世的展開：断易の数理構造
- (4) 易数と医理：医易のベクトル
- (5) 象数易と術数学：中国的自然哲学の構築

なお、各年度、象数易関連文献の読解ワークショップを開催するとともに、象数易または科学史の分野で関連する研究者を国内外から招聘し、国際研究集会を企画し、研究成果を発表するとともに、国際的な研究者ネットワークを構築し、象数易、術数学の科学思想史的な考察を試みる国際共同研究プロジェクトの立ち上げを図る。

4. 研究成果

前漢の経学において、京氏易を代表とする象数易が台頭し、易数と曆数を結合させていく具体的様相を追究し、漢代思想革命に果たした役割を考察した。とりわけ、当時に流行した曆運説の数理構造の解明を試み、京氏易、緯書と天文曆数学との関連性を明確にした。そして、中世以降に唱えられた曆運説、終末論を追究し、漢代象数易を中核に据えた占術の中世的展開と理論的特色を検討した。

宋代以降の象数易について、北宋の邵雍が唱えた先天易の数理思想を分析し、思想界に与えた影響を探った。そして、図説を用いた易解釈が盛行する具体的な様相について、明末清初の図説批判を手がかりに考察し、その問題圏を明らかにした。また、京氏易の近世的展開として、断易、五行易の数理的基盤にどのように取り込まれているかを明らかにした。

象数易の史的展開を踏まえて、自然探究の学問や占術との相互作用を考察した。象数易に密接に関連するのは、天文曆数学とともに、医薬学が指摘される。そこで、易学を医学と結合させた医易の数理的考察を様々な角度から行い、それがどのような方向性を持ち、伝統医療文化の形成にいかなる作用を発揮したのかを考察した。

そして、以上の考察を総括し、象数易の数理思想が術数学の理論構築に果たした役割を検討することで、中国における自然哲学、科学思想を総合的に研究する基盤を築いた。主要な研究成果を具体的にまとめると、以下のようになる。

(1) 漢代象数易と曆運説

漢代に台頭する象数易の諸技法について、京氏易や易緯を中心に理論解析を試み、これまで難解とされてきた納音、世軌法などの数理を解明した。そして、陰陽五行説、天人感應説などの先秦から漢に至る自然哲学的言説に遡及的な考察を試み、天文曆数学との相互作用を探ることで、象数易の数理思想の理論的基盤とその形成過程を明らかにした。さらに、前漢末から後漢にかけて流行した曆運説との関連性を明らかにし、前漢末の災異説から讖緯説への変容、後漢の緯学の成立という流れのなかで、京氏易や易緯が漢代思想革命に果たした役割を明確にした。

漢代曆運説に関しては、総合的な考察を総括して論文「漢代曆運説の形成と数理」を「国立歴史民俗博物館研究報告」第233集(2022年3月刊)に投稿し、京氏易、易緯と顛頊曆、太初曆、三統曆の関係に詳しい考察を行った。また、五行説の中心的論題である五星観の形成に関しては、遡及的考察によって得られた成果として「先秦の惑星観」「先秦星辰考」の2つの論文を発表した。

国際交流と研究者ネットワーク構築については、2019年12月14-15日に近畿大学非常勤講師の伊藤裕水氏と協力して「緯書と経数学」国際シンポジウムを主催した。

(2) 京氏易の近世的展開

京氏易の近世的展開を、室町後期から江戸にかけて日本にもたらされた易占書及び抄物という形で著述された易注釈書に着目して考察し、そこに用いられている諸技法の数理構造を解析した。『卜筮元龜』『断易天機』などの断易書や『五行大義』、陰陽道関連資料を分析して、京氏易が近世になっても世俗の易占術の理論的基盤を提供していたことを明らかにした。また、断易においては、先天易や朱熹の易説との折衷が試みられていたことも指摘した。

この研究成果を踏まえて、2019年8月24-25日に北京大学の陳明教授と協力して、北京大学東方文学研究センター、北京大学人文学部、プリティシュコロンビア大学仏教フォーラムと京都

大学人文科学研究所の共催で大規模な国際シンポジウムを主催し、「日本中世的抄物資料：書寫文化與漢籍受容」という演題で研究発表を行った(総合テーマ「從中古到近代写本与跨文化交流」、場所：北京大学、日本側の参加者 23 名・紙面発表者 1 名)。

(3) 宋明易図説と明末清初の批判

邵雍の先天易、周敦頤の太極図説、劉牧の河図洛書説といった北宋の思想家が唱えた易図説の数理構造を明らかにし、朱子学の理論的基盤に据えられた後に、宋明理学にどのような作用を發揮したのかについて、明末清初の黄宗羲、毛奇齡、胡渭等による易図説批判を手がかりにして探り、宋明理学から漢学復古へと向かう轉換の具体的様相を明らかにした。また、方以智学派や江永の象数学について、先天易を中心とする易図説との関連性を追求し、象数易という「中国的数学」の独自性を追究した。

その研究成果は、2020 年 3 月に人文科学研究所にて退職記念講演(演題「易学象数論の世界線 中国の科学と占術」)、2020 年 9 月に日本易学連合会近畿支部秋季研修会にて招待講演(演題:「易理と曆数:中国的パラダイム形成」)を行う予定であったが、新型コロナ・パンデミックの騒動で中止になった。そのために、未発表のままであるが、現在、講演原稿を加筆して投稿する準備に取り組んでいるところである。

(4) 易理と伝統医療文化:

中国伝統医学の形成と展開に、易を中核とする術数学がどのような作用を發揮したのかについて様々な角度から考察を試みた。とりわけ、日本残存資料に着目し、室町後期の抄物、近世の儒医による医易を考察した。そして、鍼灸医術や薬物療法を中心とする医薬学が、養生術を包含し、易理や術数と結合することで、多様な医療体系を創出させてきたことを明確にし、難病治療に特化する現代医薬学の排外的で狭隘な研究体制と正反対のベクトルを有していることを指摘した。

その研究成果を踏まえて、中国の成都中医薬大学、北京中医薬大学、韓国の東医宝鑑村で行われた国際研究集会に参加し、医学理論の構造的な特色や日本の展開についての講演を行った。国内においても、森ノ宮医療大学教授の長野仁氏と協力して近世医学史の再構築を試みる共同研究プロジェクトを推進し、NHK や富山鍼灸学会との共催イベントを主催したほか、日本中医薬学会第 11 回学術総会などで講演を行い、科学思想史のアプローチによる伝統医療文化の遡及的考察、現代鍼灸の理論構築の必要性などを提言した。さらに、2022 年 6 月に予定された韓国での医方類聚ワークショップに寄稿し、基調講演を行うことになった。

(5) 象数易と術数学のパラダイム形成

京氏易や易緯の数理思想を手がかりに、漢代において先秦方術から中世術数学への変容がどのように起こったのかについて、拙稿『術数学の思考 交叉する科学と占術』(単著、臨川書店、2018)において詳論した。その後、象数易が中世、近世にどのように史的展開を呈し、術数学の理論構築に関与したのかについて、多角的な考察を試みた。漢代曆運説には、道教の終末論、唐宋の太乙術などで改変説が唱えられ、唐代、宋代には太乙神信仰として国家の祭壇造営も行われるに至ったことを論証した。また、その日本的展開として、三善清行の革命勅文に発端する改元論争を詳考し、唐代の術数書を基盤として易緯、詩緯に遡及的な解釈がなされたことを明らかにした。その考察結果の一部は、論文「中国古代の曆運説 数理と展開」にまとめて公表した(水上雅晴編『年号と東アジア 改元の思想と文化』所収、八木書店、2020 年 4 月)。

2019 年 2 月に麥文彪と一緒に論文集『天と地の科学』を編集し、2021 年 3 月には臨川書店より『術数学の射程』『天と地の科学』和文篇の再販を実現させ、それを契機として執筆者を中心に国内外の術数学、科学史研究者との連携を深めた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 3件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 武田 時昌	4. 巻 233
2. 論文標題 漢代曆運説の形成と数理	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国立歴史民俗博物館研究報告	6. 最初と最後の頁 13-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 武田 時昌	4. 巻 1
2. 論文標題 日本中世的抄物資料：書写文化与漢籍受容	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 従中古到近代写本文化与跨文化交流” 国際學術研討会會議論文集	6. 最初と最後の頁 245-247
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 武田 時昌	4. 巻 -
2. 論文標題 中国古代の曆運説 数理と展開	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 水上雅晴編 『年号と東アジア 改元の思想と文化 』	6. 最初と最後の頁 547-572
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 武田 時昌	4. 巻 -
2. 論文標題 人日と臘日 年中行事の術数学的考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 水口幹記編 『前近代東アジアにおける 術数文化 』	6. 最初と最後の頁 26-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 武田 時昌	4. 巻 -
2. 論文標題 福澤諭吉の科学啓蒙	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 町泉寿郎編『漢学と医学』	6. 最初と最後の頁 138-151
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 武田 時昌	4. 巻 895
2. 論文標題 同類相感の精通力 大医精誠の道	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 医道の日本	6. 最初と最後の頁 146 -147
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計20件（うち招待講演 10件 / うち国際学会 10件）

1. 発表者名 武田 時昌
2. 発表標題 長寿のサイエンス
3. 学会等名 日本中医薬学会第11回学術総会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 武田 時昌
2. 発表標題 易の予言力
3. 学会等名 中国占術研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 武田 時昌
2. 発表標題 黄宗羲『易学象数論』の数理思想
3. 学会等名 象数易研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 武田 時昌
2. 発表標題 出土医書研究在日本
3. 学会等名 中国出土医学文献与文物研究国際論壇（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 武田 時昌
2. 発表標題 中世紀的中国科技文化对日本社会的影响
3. 学会等名 從中古到近代：写本与跨文化研究国際學術研討会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 武田 時昌
2. 発表標題 術数学の形成
3. 学会等名 全北大学校科学文明学研究所科学文明学特別講演会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 武田 時昌
2. 発表標題 東医宝鑑と日本近世医学
3. 学会等名 東医宝鑑討論会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 武田 時昌
2. 発表標題 中国医籍の伝播と自国化：東アジア近世医療文化比較試論
3. 学会等名 東医宝鑑国際会議（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 武田 時昌
2. 発表標題 従伝統医学看東亜近代化
3. 学会等名 中日韓三国医薬文化交流及古籍研究系列学術講座（第二期）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 武田 時昌
2. 発表標題 緯書研究の新展開
3. 学会等名 「緯書と漢代経書学」国際シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 武田 時昌
2. 発表標題 科学史家が占う日本鍼灸の未来
3. 学会等名 富山鍼灸学会学術講演会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 武田 時昌
2. 発表標題 鍼灸は医学である 医学概論の遡及的考察
3. 学会等名 第67回(公社)全日本鍼灸学会学術大会(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 武田 時昌
2. 発表標題 中世紀的中国科技文化对日本社会的影響
3. 学会等名 “跨越辺際的古代東方医学：対話与互動” 国際学術討論会(国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 武田 時昌
2. 発表標題 近世社会医学思想 日中医療文化比較論
3. 学会等名 北京中医薬大学中医学院主催中日聯合活動特別講演会(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 武田 時昌
2. 発表標題 ハラノムシの医学思想史的考察
3. 学会等名 大阪府鍼灸師会2018年度研修会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 武田 時昌
2. 発表標題 易と黄帝内経～医術と術数の科学史～
3. 学会等名 茨木神社復旧支援 チャリティー講演会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 武田 時昌
2. 発表標題 珠算：ソロバン暗算術
3. 学会等名 人文研アカデミー2018「技芸の伝統と学問：中国ユネスコ無形文化遺産」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 武田 時昌
2. 発表標題 易と東アジア伝統医学
3. 学会等名 全日本鍼灸学会中国四国支部認定講座講演（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 武田 時昌
2. 発表標題 中国古代の惑星観
3. 学会等名 術数学東京ミーティング2019
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 武田 時昌
2. 発表標題 仙薬：延年益寿のアルケミー
3. 学会等名 第14回京都大学人文科学研究所 TOKYO漢籍SEMINAR
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 武田 時昌、永塚 憲治共編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 京都大学人文科学研究所	5. 総ページ数 130
3. 書名 『近世医家新出史料集』第二冊（増補版）	

1. 著者名 水上雅晴編（武田時昌・所功・高田宗平他22名による共著）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 八木書店	5. 総ページ数 792頁 + カラー口絵32頁
3. 書名 年号と東アジア 改元の思想と文化	

1. 著者名 水口幹記編（武田時昌・山下克明・鄭淳一他20名の共著）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 312頁
3. 書名 前近代東アジアにおける 術数文化	

1. 著者名 町泉寿郎編（武田時昌・坂井建雄・小曾戸洋他17名の共著）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 戎光祥出版	5. 総ページ数 283
3. 書名 漢学と医学（講座「近代日本と漢学」第三巻）	

1. 著者名 武田 時昌	4. 発行年 2019年
2. 出版社 臨川書店	5. 総ページ数 288
3. 書名 術数学の思考：交叉する科学と占術	

1. 著者名 武田 時昌・麥 文彪共編（武田 時昌、Cullen Christopher、Pai, Venketeswara R.他26名の共著）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 京都大学人文科学研究所	5. 総ページ数 517
3. 書名 天と地の科学	

1. 著者名 名和 敏光編（武田 時昌、名和敏光、孫 英剛他10名の共著と『天地瑞祥志』の訳注）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 汲古書院	5. 総ページ数 304
3. 書名 東アジア思想・文化の基層構造	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計3件

国際研究集会 「從中古到近代 : 寫本與跨文化 国際學術研討会 (International Symposium on “ From Medieval to Pre Modern Times: Manuscripts and Cross Cultural Studies)	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 「緯書と経書学」国際シンポジウム	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 日中医学史セミナー2018	開催年 2018年～2018年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------